

月刊 ウィーン

GEKKAN-WIEN

Monatsmagazin Japanisch

現地オリジナル取材と編集で
ウィーンを伝える月刊情報紙

創刊平成元年 創刊34年目 **Nr. 392**

2022年9月号



Ehediptychon des Dr. Johannes Cuspinian und der Anna Cuspinian-Putsch Lucas Cranach d.Ä. (Kronach 1472–1553 Weimar) 1502
Öl auf Fichtenholz (Picea spec.), jeweils 60 x 45 cm © Sammlung Oskar Reinhart «Am Römerholz», Winterthur

杉本純の原子力の話 II ウィーンと京都

125

アジア諸国の若手研究・技術者、学生らが参集し原子力・放射線利用について情報・意見交換を行う「アジア若手原子力シンポジウム」(原子力委員会主催)が七月一〇日に開幕した。同シンポジウムはオンライン形式による開催で、一日までの二日間、インドネシア、カザフスタン、タイ、バングラデシュ、フィリピン、ベトナム、マレーシア、日本、モンゴルなどから四〇歳未満の若手社会人・学生らが集まり議論に臨んだ。

初日の一〇日には、一般聴講者を含め約一〇〇名参集のもと、グループディスカッション「カーボンニュートラルと原子力」が行われた。討論に先立つ基調講演では、東京大学大学院



工学系研究科准教授の小宮山涼一氏が、昨今の日本における化石燃料輸入増に伴う電力価格の上昇傾向や電力供給予備率確保の厳しい見通しを示し、現在、原子力発電所の再稼働が将来に向けた脱炭素化とともに、エネルギー安全保障を達成する上での重要課題の一つとなっていることを強調。さらに、カーボンニュートラル実現に向けた視点として、「S+3E+R」(安全、安定供給、経済性、環境適合性、レジリエンス)を掲げた上で、「これらを同時達成するエネルギー源は存在しない」と述べ、各資源・技術の長所・短所を踏まえたエネルギーベストミックスを図っていく重要性を説いた。

また、元インドネシア原子力庁長官のジャロット・スリステイオ・ウィスヌブROTO氏は、同国の二〇六〇年までのゼロエミッション電源構想を披露。同氏の説明によると、太陽光発電の大幅拡大とともに、早ければ二〇四五年にも地震によるリスクが比較的低いカリマンタン島西部を立地候補に原子力発電の導入を見込んでおり、二〇一九年に行った調査で約九割の住民が賛成しているという。

基調講演を受け、若手参加者らは六名ごとの四グループに分かれディスカッション。各国におけるエネルギー政策や化石燃料への依存状況、福島第一原子力発電所事故の影響、小型モジュール炉の可能性などに関して議論した。ディスカッションの成果発表では、パブリックアクセプタンス(PA)についても積極的に意見が交わされていたことから、講師に当たった小宮山氏は、「PAは原子力を進める上で避けられない課題だ」と述べ、教育の役割や科学的根拠に基づく意思決定プロセスの重要性を示唆した。会合二日目の一日には、放射線利用や核セキュリティをテーマに活発な議論が行われた。

さて、今月のウィーンと京都の対比では、両市出身の偉大な哲学者(その三)を紹介したい。一九二四年にウィーンに生まれたポール・ファイヤアーベントは、高等学校卒業後にドイツ陸軍に徴用され、ロシア戦線北部で撤退する部隊の指揮中に銃弾を受け、生涯歩行障害を被ることになった。戦後はウィーン大学で歴史学と社会学を学んだが、すぐに物理学に転じた。そこで出会ったフェリックス・エーレンハフトの実験は、後年の自然科学に対する見方に影響を与えることになった。さらに研究領域を哲学に変え、一年に観察問題に関する学位論文によりウィーン大学から博士号を取得した。四八年の国際夏季学校で出会ったカール・ポパーを指導教授として選び、五二年にロンドン・スクール・オブ・エコノミクスに移った。五五年、英ブリストル大学で最初のアカデミックポストに就き、科学哲学の講座を担当した。この時期、科学哲学における近代理性主義的立場に反するとともに、ルールを教条主義的に使用することを否定する、科学についての批判的な見方を唱えた。著書「方法への挑戦」は科学に関する現代の哲学的見地についての有名な批評となった。五八年、カリフォルニア大学バークレー校に移り、アメリカの市民権を得た。ロンドン、ベルリン、イエール、オークランド大学などで教授職を務めた。新科学哲学、認識論的アナキズム、及び反・反証主義学派の重鎮として、トーマス・クーンらと並び、科学哲学及び科学社会学において影響力を持った。

一方、一九二五年に仙台市に生まれた梅原猛は、愛知県知多郡で育つ。私立東海中学校卒業後の四二年、広島高等師範学校に入学するが二ヶ月で退学、翌年第八高等学校に入学。四四年夏から名古屋の三菱重工工

場へ勤労奉仕。米軍の空襲による死者が続出する状況で、梅原は「この戦争は負けるに違いない」「自分がこの戦争で死ぬのはほぼ確実」と考え、哲学書や宗教書を読み漁り、死の理由を探さようになっていた。西田幾多郎ら京都学派の哲学に関心を抱き、四五年京都帝国大学文学部哲学科に入学も、直後に徴兵され陸軍二等兵として入営。終戦後に復学して四八年大学院に進学し、山内得立、田中美知太郎の指導を受けた。ハイデッガー哲学に惹かれたのもギリシア哲学を専攻。二〇代後半、強い虚無感に襲われて、賭博にのめり込むような破滅的な日々を送る。梅原はニーチェやハイデッガーの実存主義哲学から出発したが、現実の生活が苦しくなると実存を頼ることはできなくなり、実存の論理を超えるために自分の心の暗さを分析して論文「闇のパトス」を書き、ニヒリズムを超えて人生を肯定するために「笑い」の哲学を目指したという。三〇代後半から日本の古典美学への関心を強め、その後は精力的に神道・仏教を研究し、梅原日本学と呼ばれる独自の世界を開拓。立命館大学教授、京都市立芸術大学教授、同学長、国際日本文化研究センター初代所長などを歴任。左京区にある哲学の道近くの和辻哲郎旧邸に住んでいた。九九年に文化勲章を受章した。

余談であるが、現在のインドネシア原子力庁長官アンハー・アンタリクサワン氏は、筆者が原子力機構炉心損傷安全研究室長時の研究生として半年間一緒に過ごした。ファイヤアーベントは読んだことはないが、学生時代の下宿が左京区にあり哲学の道もよく通ったこともあって、梅原の「哲学する心」だけは読んだことがある。今月も両市に関連する偉大な哲学者を紹介することができた幸運に感謝しつつ、ファイヤアーベントの写真は使用許可が必要なので、代わりに筆者が描いたウィーン大学のスケッチを掲載させていただきます。



■ 杉本純 元京都大学教授
元原子力機構ウィーン事務所長

杉本純の原子力の話 II 「ウィーンと京都」の第1回からの全記事が次のサイトに掲載されています : <http://wattandedison.com/Sugimoto.html>

本誌執筆者の主な著作

- 河野純一著「不思議なウィーン」
- 河野純一著「ウィーン遺聞」
- 河野純一著「ウィーンのドイツ語」
- 河野純一著「横顔のウィーン」
- 須永恆雄訳「ウィーンの内部への旅」
- 須永恆雄編訳「マーラー全歌詞対訳集」
- 近藤常恭著「ウィーンの街の物語」
- 福田和代共訳「サフィア」

